

『砂漠の国の柔道場』『第七話』男の友情・アワード・アラディ中佐

岡本文夫（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）



謹厳実直なサウジ軍人の典型・アワード中佐

石油立国のサウディアラビアでは石油開発現場は産業上も軍事戦略上も最重要拠点であり、カフジ港はコーストガードが駐屯して石油基地を守っている。

コーストガードと言っても、我が国の国土交通省管轄の海上保安庁(Japan Coast Gard)とは違って、内務省管轄の交戦権も有するれっきとした軍隊である。

第四章でも紹介したが、一回目の現地勤務時代、カフジ港駐屯基地の司令官であるアワード少佐（当時）とは奇妙なご縁で大変親しく交流した経緯があった。

『何回逮捕されても夜の漁労を止めないとんでもない奴がいる』という怪しからぬ事実が接点だった。そして、一回目の本社帰任後、広報課長代理として担当する広報誌の巻頭言にアワード少佐の謹厳実直な軍人ぶりを紹介したところ、現地での日本人の行状を監視する秘密警察のエージェント（韓国人）の報告によって知るところとなり、岡本の仕業に違いないと推察し、二人の関係は一層深まった経緯があった。

従って、筆者の再赴任を中佐に進級していた司令官は大歓迎してくれた。

その半年後、将来を嘱望されているアワード中佐は、海軍先進国であるノルウェイに1年間の留学することとなり、カフジを離れた。彼は元々パキスタン海軍に留学して学んだエリートでもあった。

その不在の間に、筆者はコーストガード全体を巻き込む大事件を起こしてしまった。

釣りもシュノーケリングも得意な筆者は、溜まり場・岡本亭に集まる仲間に美味しい物を食べさせようと、非番の時はアラビア湾でセッセと海の幸確保に余念がなかった。ある時、着任して間もない弟分を連れて基地北方のダイビングスポットで素潜り漁に励んでいた。作業開始時には穏やかだった海が、半時間後には突風が吹いて荒れ始めたので中止しようとしたが、弟分は離れてしまっていた。海べりの小高い砂丘に上つて、息継ぎに浮上する筈のシュノーケルを探しても見つけられない！

『遭難させてしまったか！』

筆者は、車に乗ると事務所に急走してシフト当番のパレスチナ人スタッフのファリッドに救助隊の出動を要請させると、直ちにダイビング現場に取って返した。

すると、何という事か！弟分は砂浜に寝そべっているではないか。全ては筆者の早とちりだったのだ。「バカヤロウ！見失ったから、溺れてしまったと心配してたんだ！」

「エエッ！僕は岡本さんがいなくなったり、車もないから、途方にくれてたんですよ」。そこへ要請を受けたコーストガードの軍用トラックが到着して、兵隊たちがバラバラと駆け付けてきたので、筆者は進退窮まってしまった。幸い、腹心の部下であるファリッドも掛けつけてくれたので、全ては筆者の早とちりであって犠牲者は出なかった旨を通訳してくれた。急な大動員を掛けられたコーストガードたちは激怒して納まらない。

筆者と後輩を逮捕連行すると怒鳴りつけた。老練なファリッドは、この二人は憔悴しきっているから今は帰宅させて、明朝必ず出頭させるからと調整してくれた。

「いいか！必ず出頭させるんだぞ！」と、リーダーは捨て台詞を怒鳴って帰隊した。**Shipping** の部下たちとは有難いものだ。サウジ人の色々な人脈を通じて処分緩和の裏工作をしてくれていたようで、翌日の取り調べは筆者と後輩は別々に行われて、散々絞り上げられたものの、幸い収監は免れることが出来た。

アワード中佐がノルウェイ海軍への留学を終えて帰隊したと聴いて、筆者は早速表敬に駆け付けた。「中佐、お帰りなさい。ノルウェイ海軍は如何でしたか？（笑）」

「いやあ、本当に得難い体験をさせて貰ったと感謝してるよ（笑）」

表敬の目的は、単なる挨拶だけではなく、留守中の大失敗を人づてに聽かれて激怒されるよりも、自らで告白することで、罪一等減じて貰おうという計算もあった。

「実は、中佐のお留守中に隊の皆さんには大変ご迷惑をお掛けしてしまいましたねえ」

「ウン、留守中の出来事については逐一報告をさせているが。エエッ！あれは、ミスター・オカモトがやったのか！」。楽しい談話中の表情がキリッと変わった。

中佐は筆者と目を合わせて、次の言葉を発した。

「ミスター・オカモト。頼みがある！」「はあ、何でしょうか？」

「あれは、部下のトレーニングに非常に効果的だ。是非、もう一度やってくれ！」ふたりが同時に、大爆笑したことは言うまでもない。

筆者の現地時代の直属の部長・池野侃さんは、厳しいカフジ勤務を連続30年務めあげた鉄の意思の持ち主だった。部下である Shipping 担当課長が、スリーシフトの厳しい管理者の激務に耐えかねて数年で去っていくのに対して、部下のローテーションの世話を焼きながらも、自分はひたすら耐えながら任務に励んだ30年だった。

実は、池野部長は湾岸戦争勃発の一か月前に定年を迎えていた。誰にも後ろ指を指されることなく危地を去ることが出来たというよりも、去らなければならなかつたのだ。しかし、この鉄の男は同僚たちが死ぬかも知れない窮状にいるのに、自分だけが安全を求めるとして、異例の定年延長を申し出た。会社は、余人を以って代えられない男の申し出を歓迎して、会社始まって以来初の定年延長を認めた。

そして、気の弱い者から逃散が進む中、池野一岡本ラインは数こそ細ったものの、開戦の瞬間までラインの体を崩すことはなかつた。

池野部長の行動は、イラク軍の砲撃が続行される中でも常に模範的であり、同僚の安全確保を気遣うものであった。終戦後の破壊された施設の復旧でも常に先頭に立ち同僚の心を明るく励まされた。敷設機雷への恐怖から、世界中の船会社がアラビア湾奥部へのタンカー配船を拒否しており、カフジの海務従事者自身も沖合勤務を拒否する中、サウジ海軍本部へ乗り込んで、多国籍軍掃海隊のカフジ方面出動を実現させた。それでも海上勤務をしたがらない従業員へ範を示すために、60マイル沖合までタグボートに乗って出荷第一タンカーの出迎えに行かれた。こうして、陸上施設の復旧と共に、原油引き取りのタンカー航路復活を確認して、自らの任務の終了とされた。

いつもならば、必要に応じて呼びつけるアワード中佐だが、珍しく筆者のデスクまでやってきた。

「ミスター・オカモト。池野部長がいよいよカフジを去られるそうではないか。その前に、是非我が家にお招きさせて頂きたいのだが、どうだろうか？」

「いや、池野部長こそ中佐には離任のご挨拶に参上すると言っておられましたよ。今日の午後あたりには予定しておられる筈ですがね」

「それじゃ、今夜は本官のご招待を受けて貰いたいと伝えて欲しい」。

伝言を聞いた池野部長は、早速コーストガード事務所に挨拶に向かわれた。

謹厳実直な軍人であるアワード中佐は、細やかな配慮と教養の持ち主でもあった。
「日本人の賓客をお招きするためには、今夜は羊ではなく魚料理を準備しました」。
中佐と池野部長の讃え合う対話は麗しかつた。

「私は、池野部長のまるで軍人のようなお仕事ぶりを尊敬しておりました」
筆者は二人の対話を増幅する役割だった。

「中佐。それは当然ですよ。池野部長は、今はなき海軍兵学校の最後の期の生徒でしたから、軍人精神の持ち主。我々のような部下とは人格が違います」

「サウジ海軍本部まで乗り込んで、多国籍軍の掃海隊まで引っ張ってこられてカフジ

航路の復活まで実現された責任感と実行力には驚かされました。しかも、海務従事者全員が沖合就労を拒否しているのに、率先垂範して60マイル沖合まで出荷再開第一船を出迎えにいかれましたよね」

「ああ、それは私だけで行ったのではありません。この岡本さんも、同行は許可しないと命令したにも拘わらず一緒に乗り込んでくれましてね」

「ああ、彼のことはよく解ってます。何回逮捕しても、夜の出漁を止めない男ですから。部下が射殺してしまわないかと、いつも心配していたんですよ」

軍隊ジョークに、一同は大爆笑した。

「ところで湾岸戦争中、中佐はどのような任務についておられたんですか？」

筆者の間に対して、中佐はよくぞ訊いてくれたと相好を崩した。

「クウェイトを占領するイラク軍への艦砲射撃を行う戦艦群の旗艦ミズーリに乗ってパイロットを務めてきました」。これは、痛快な初耳だった。

そして、『Battle Ship Missouri』と飾り文字で刺繡した帽子を愛おしそうに被って見せた。多国籍軍は海岸から侵攻すると思わせる陽動作戦のために、イラク軍の射程外から戦艦の主砲射撃を行って注意を引きつけた上で、『砂漠の嵐』作戦と命名して背後の砂漠から攻め込んだ。浅瀬だらけのアラビア湾で戦艦群が作戦行動する上で、アワード中佐以上の適役はいなかった筈で、偉大な作戦貢献となったことは間違いない。

「戦艦が主砲を発射する時は、乗員全員がこうします」

中佐は、股を大きく開き、口を大きく開けて、両耳を手で覆った。

筆者は、帰任後総務部次長として、尊敬して止まない小長啓一社長の広報担当として勤務する光栄に恵まれた。社長はサウジ、クウェイト両国との利権協定の終了を控え、開発権益更新のために高級折衝を次々に仕掛けられた。渡部恒三通産大臣の両国石油大臣折衝、平岩外四経団連会長のファハド国王表敬、皇太子殿下ご夫妻の両国訪問などである。広報担当の筆者は、随行記者団のお世話役として取材協力してアラビア石油応援の記事を書いて貰えるよう腐心した。

その過程で、短時間の皮肉な形ではあるが、アワード中佐との再会がかなった。渡部通産大臣一行には、カフジで一泊して従業員を激励して頂いたのだが、筆者は随行記者団の行動には強く釘を刺すことを忘れなかった。記者的好奇心でカメラ片手に自由に動き回られたら、必ずコストガードと軋轢を生じる。

翌朝、ぼちぼち記者団を起こそうとしてスーツに着替えているところに読売新聞が飛び込んできた。

「岡本さん、警告は本当だ！朝日新聞が捕まってしまった。助けてあげて下さい！」。筆者には即座に全貌が読めた。筆者の忠告も聞かずに記者二人が軍港まで行って、勝手に写真を撮り始めた。飛んできた兵士が軽機関銃を向けてホルトを命じたのだが、読売は走って逃げてきた。これだから平和ぼけした日本人は駄目なのだ。

この場合は、両手を上げて停止するのが正解であって、走って逃げるのは射殺されて

も仕方のない行動なのだ。「アンタ、よく射殺されないで済んだなあ！」。

そこへ、恐怖で放心したような顔をして朝日記者が戻ってきた。

「岡本さん、商売道具のカメラ取り戻して下さい・・・」

この事件対応で、朝 9 時に予定している大臣一行のクウェイト向け出発は遅延するかも知れないという懸念が頭をよぎった。とにかく、事態収拾にコーストガード事務所に出頭するしかない。事件発生を急報されて、アワード中佐が事務所に出ていてくれと願った。すると嬉しや、中佐はデスクにいたではないか。

「アッサラーマレクン！シェイク・アワード。（アワード卿）」。

筆者は、踵をカチリと合わせ、大げさに敬礼した。

「オー！ミスター・オカモトじゃないか！嬉しいぞ、来てたのか」。

そして、デスクの上の一眼レフの高級カメラを指さすと、ニヤリ。「目的はこれだろ」。

「そうなんですよ。彼は、日本の有名なジャーナリストであり、アラビア石油の開発権益更新のための重要な応援団です。現地事情不案内なために僕の注意も聽かず軍港をウロウロして申し訳ない」

「逃げた方の奴は、本来射殺ものだ。制止に従った奴も本来なら収監物だが V I P 一行の来訪だと聞いていたからカメラ没収だけで勘弁してやったんだ。しかし、ミスター・オカモトが来てくれて嬉しいから、どうしたもんかなあ」

「中佐、ではこうしましょう」。筆者はカメラからフィルムを引っ張り出して感光させた。「ウン。それによし。それで、ミスター・オカモト。次はいつ赴任してくるんだ？」

「ウーン。インシャラーですなあ。中佐もお元気で。マアッサラーマ（さようなら）」。お蔭で何とか通産大臣ご一行は定刻通りにクウェイトに向けて出発出来た。しかし、筆者は朝飯を食べ損なった。

池野部長が引退されてから 15 年後、池野部長から最も薰陶を受けていたサウジ人スタッフであり、池野部長の次の次に部長職を継いだトワイジリが来日した。

お元気なうちに再会したいという思慕と共に、利権協定が終了した後のカフジがどうなっているか尊敬して止まない元上司に報告したかったのだ。

カフジ在勤中にトワイジリと交流の合った元従業員 10 名が歓迎に集まって、池野さんとトワイジリを囲む盛大な会合で盛り上がった。筆者は信頼関係にあったスタッフや柔道の弟子たちの消息を聞くのが楽しみであった。そして、最大の朗報はカフジの司令官アワード中佐が、その後栄進を重ね、ついに内務省コーストガードのトップとなり、東部地区の要衝ダンマンの本部でアラビア湾全体に目配りする最重要職にいるとのニュースだった。さもありなんである。統率力の見事さ、危機に当たっては率先垂範する行動力と責任感。同時に鋭い洞察力と包容力と併せ持つ人格。

筆者が犯した数々の規則違反も理解してジョークで返してくれるユーモアセンス。

残念ながら、もう遭うことはないのだが、彼が残してくれた爽やかな男の友情に対する感謝は、いつまでも消えることはない。



アラビア湾最奥部への配船復活第一船を誘導してきた池野部長



おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」(財界研究所刊)を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段(クウェート国柔道連盟七段)。

To be continued